

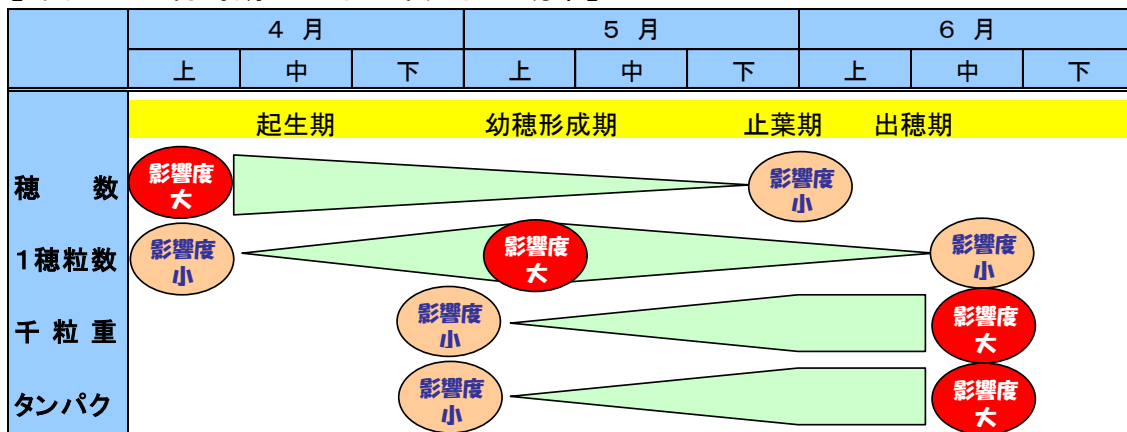
～今後の栽培管理について～

1 幼穂形成期以降の追肥について

幼穂形成期の追肥は、1穂粒数の増加に寄与しますが（図1）、過度に効くと急激に草丈が伸長したり、茎の淘汰が進まず過繁茂となるおそれがあります。

本年は、4月下旬の降水量が少ないことから、肥料が効いてくるまでに時間を要しています。このため、回目の追肥までの期間が短い場合、前回の残存分と併せて一気に肥料が効いてくることも考えられます。5月中旬の葉色が濃い場合は、回目の追肥を少し遅らせるか、施肥量を控えめとし、止葉期～出穂期（6月上旬～中旬）にも、確実に追肥できるように、生育をコントロールしましょう。

【図1 生育時期による窒素追肥の効果】



【表1 幼穂形成期（5月中旬頃）の生育に応じた窒素追肥量の目安】

幼穂形成期の茎数	窒素追肥量の目安	備考
1,500本/m ² 以上	2kg/10a	葉色が濃い場合は追肥を遅らせる。
1,200～1,500本/m ²	2～4kg/10a	生育量に応じて2～4kg/10aの範囲で追肥を行う。 葉色が濃い場合は追肥を遅らせる
1,200本以下	4～6kg/10a	葉色が濃い場合は、少なめとする。

2 病害防除

①眼紋病

- ・連作ほ場、短期輪作ほ場では発生しやすくなります。
- ・連作や過去に発生が見られたほ場では、幼穂形成期頃に防除を実施しましょう。

【表2 眼紋病の防除薬剤例 H30.5.1現在】

薬剤名	使用倍率	使用時期	使用回数
カンタスドライフロアブル	1,500倍	収穫45日前まで	2回以内

②赤さび病

- ・高温、乾燥条件が続くと発病しやすくなります。
- ・例年、赤かび病と同時に防除することで十分に抑えられますが、5月下旬から発生するとまん延するおそれがありますので、この時期に発生が見られる場合は防除を実施して下さい。

【表3 眼紋病の防除薬剤例 H30.5.1現在】

薬剤名	使用倍率	使用時期	使用回数
アミスター20フロアブル	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内

※DMI剤（「シルバキュア」、「リベロ」等）も登録がありますが、赤かび病の防除で使用するため、連用とならないようにして下さい。

3 雑草防除

雑草の生育が進むと除草剤の効果が低下します。また、防除通路や欠株となった箇所では雑草が繁茂しやすくなります。除草剤の使用時期を遵守し、適切に処理しましょう。

【表4 秋まき小麦の除草剤例 H30.5.1現在】

除草剤名	対象雑草	使用時期	10a使用量	回数
エコパートフロアブル	シロザ タデ類 ハコベ	春期（雑草発生始） （止葉抽出前まで） （収穫45日前まで）	50～75ml	2
MCPソーダ塩	シロザ	小麦の幼穂形成期 （収穫45日前まで）	200～300g	1
バサグラン液剤	タデ類 ハコベ		100～150ml	1
ハーモニー75DF水和剤	ナズナ スカシタゴボウ		7.5～10g	1

- 【注意事項】
- ・エコパートフロアブル：展着剤は加用しない。
 - ・MCPソーダ塩：好天日（20℃以上）に散布する。
 - ・バサグラン液剤：好天の続く時期に散布する。
 - ・ハーモニー75DF：使用後は器具類を専用の洗浄剤で洗う。